



Title	植民地朝鮮「暗黒期」の<日本語文学>の再検討のために : 対形象化と植民地的主体について
Author(s)	呉, 世宗
Citation	琉球アジア社会文化研究 = Studies of the society and culture in Ryukyu and Asia(14): 1-19
Issue Date	2011-10
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24084
Rights	

植民地朝鮮「暗黒期」の〈日本語文学〉の再検討のために

——対形象化と植民地的主体について*1

吳世宗

一 はじめに

韓国では、一九三〇年代末あたりから一九四五年までを文学史的に「暗黒期」と呼ぶことがある。これは文学批評家・白鐵が『朝鮮新文學思潮史』（首善社、1948）で用い、広まった用語である*2。「暗黒期」とは、第一に、朝鮮文学報国会創設、創氏改名実施、国民徴用令発布、朝鮮語学会事件といった植民地末期かつ帝国日本の末期症状の現れの中で朝鮮人の文学活動が弾圧されつつも、そのもう一方で朝鮮人が自発的に植民地主義に加担していった時期を指す。第二に、朝鮮人の文学者たちが朝鮮語ではなく日本語で創作活動をせざるを得なかったために「朝鮮」固有の文学が形成発展できなかった時期、ということも含意している。つまり「暗黒期」という規定は、時代状況を示すだけでなく朝鮮の日本語による文学活動や作品を「朝鮮文学史」から除外する規範性も帯びているのである。

*1 本稿は二〇一一年一月二十九日に行われた、東京大学 COOE「共生のための国際哲学研究センター」（UTCP）主催のワークショップ「〈暗黒期〉の〈日本語文学〉を再考する——植民地朝鮮の日本語文学」で筆者（吳）が行った報告に加筆・修正したものである。

*2 「暗黒期」という発想や言葉は、白鐵のオリジナルとは言えないものである。白以前にも金台俊が『朝鮮文学史』（学芸社、1939）で高麗時代を文化的な「暗黒の時代」と呼んでいる。

その「暗黒期」に対比されるのが、「光復節」という言葉である*_三。「暗黒」と「光復」が形作る明確な二項対立は、「暗黒期」が規範性を帯びる以上、善／悪の対立でもある。そのような規範的対立は、林鍾国『親日文学論』（平和出版社、1966）や宋敏鎬『日帝末暗黒期文学研究』（세문사、1991）などに引き継がれ、親日派／民族派、抵抗／協力というように変奏されていった。それにより民族派／親日派、暗黒／光復、日本語／朝鮮語、支配者／被支配者、敵／味方といった認識の布置が「暗黒期」という時代規定をさらに強固なものとしていき、また確定的な価値観として人々に内面化されていった。

そのような認識の布置がもたらす固定的な視点は、「暗黒」側にあるものを否定すべきものあるいは恥部とみなし、その結果、植民地期の朝鮮人による日本語文学作品はただ日本語としてあるがゆえに否定の対象とみなすよう作用してきた。そのように形式のみで作品や文学者の思想を判断することは、内側からの慎重な読解とそれに基づく問題の抽出といった文学研究の基礎的な作業を留めてしまうものである。

もちろん、だからといって林鍾国や宋敏鎬の研究の意義が貶められるわけではない。とりわけ林鍾国『親日文学論』は、韓国においても日本においても未だ課題として残っている親日派について議論する際には、常に参照されるべき仕事となっている（『親日文学論』が出版されて後、ほとんど黙殺され続けてきたことも、親日派の問題の根深さを示すものである）。日本の植民地支配にいかなる形であれ加担していった朝鮮人文学者に関する資料を丹念に探し求め、批判されるべき対象として提示した『親日文学論』は、植民地期の文学を研究する際の基礎的文獻である。その意味で『親日文学論』の意義は強調してもしすぎることはない。

*_三 暗黒期に對置される概念として「光復期」を位置づける議論は、註1で示した UTCP ワークショップで鄭百秀も指摘している。本稿は鄭の議論を参考にはしているが、この点に関しては、二〇一〇年八月に UTCP と韓国の大学（延世大学等）との間で行われたワークショップでの呉の報告がもとになっている。

だが林は、尹大石が指摘するように、「国民文学」の樹立に価値を置いたために、非主体的で従属的な親日派に対しては批判するが、植民地朝鮮で「国民文学」を打ち立てようとした主体的親日派には免罪符を与える可能性もある振れた議論を行っている^{*四}。林は、人間は国家的動物であるのだから文学においても国家観念は強調されねばならないのではないかという前提のもと、親日文学者が主張した国家主義的文学理論を注目すべきポイントの一つに数え上げている。そのうえで「今後、韓国の国民精神に立脚して、韓国の国民生活を宣揚する、韓国の国民文学を樹立しようとする人々のために、かれらの植民地的国民文学はよき参考資料となるであろう」という意見も述べている^{*五}。そのように「国民文学」を巡って振じられた議論を行わざるを得なかったところに、植民地文学研究の困難が『親日文学論』によって示されてもいる^{*六}。

他方、近年、韓国において金允植だけでなく、尹大石や鄭百秀といった次世代の研究者が、朝鮮人文学者による〈日本語文学〉の内側からの再評価に取り組み始めている^{*七}。しかし個々の作品や作家に寄添い内在的に論じるというスタンスの採用は、その意義を取り出すという利点を持ちつつも、そのことが当時の〈日本語文学〉の多くが植民地体制擁護的な側面を―それが外見上のことであつたとしても―帯びた事実を、ともすれば低く見積もってしまう危険性も抱えている。

^{*四} 윤대석 『식민지 국민문학론 (植民地国民文学論)』 『역락』, 2006, p. 68 参照。

^{*五} 引用は大村益夫訳『親日文学論』(高麗書林、一九七六年)、四六八頁より。

^{*六} 윤대석의 『親日文学論』に関する言及は一理あるが、しかし図式的すぎるものである。林が「国家主義」の「国家」とは「理論上の国家」と述べている点(『親日文学論』、四六六頁(翻訳))や「国民文学」を広義と狭義に分けて論じている点などを踏まえるならば、もう少し慎重な読解が必要であろう。もちろん林自身も、自らの理論の問題や意義を詰め切れていないわけではないが。

^{*七} 日本においてはすでにいくつかの研究論文が出版されている。例えば林浩二、川村湊『生まれたらそこがふるさと』などである。

そのように植民地文学や（日本語文学）を検討することは、大きな困難を伴う。そのため（日本語文学）作品を内在的に解読し、それら作品群の可能性や意義を汲み取ろうとするとき、白鐵の視点や林鍾国等の成果を批判的に引き継ぎながら、別様の批判的な認識枠組みや理論を精緻化していくことが最低限必要な作業となる。そしてそのような作業を行っていく際には、当然のことだとしても、従来の文学史や先行研究の慎重な検討が欠かすことのできないものとなる。本稿では「暗黒期」の文学作品を検討するにあたって、「暗黒期」だけでなく広く（日本語文学）の見直しを推し進めた近年の研究である鄭百秀『한구근대의 植民地体験과 二重言語文学』と、日本で出版された同著者の『コロナリズムの超克―韓国近代文化における脱植民地化への道程』を取り上げ^{*八}、その研究方法の意義と問題を指摘することで、作品分析の新たな認識枠組みや理論を構築するための予備的検討を行うものである。

議論に先立ち、ここで（日本語文学）という言葉について若干触れておきたい。

林鍾国は『親日文学論』で、「親日文学」と「親日派」の文学を区別している。親日派ではない者が書いたものであっても、その作品が帝国日本を礼賛する要素を持つならば、それは「親日文学」とされる。その意味で「親日文学」は、「親日派」の文学も包括し、また非親日文学との線引きも図る概念となっている。日本語の作品はその両方にまたがりうる位置にある。それに対してここでは、朝鮮人文学者によって日本語で書かれた作品を、区別なしに総じて（日本語文学）と呼んでおく。（日本語文学）という用語を用いるのは、第一に、露骨に「親日文学」

^{*八} 鄭百秀『한구근대의 植民地体験과 二重言語文学（韓国近代の植民地体験と二重言語文学）』아세아나루、2000。鄭百秀『コロナリズムの超克―韓国近代文化における脱植民地化への道程』草風館、二〇〇七年。

的である作品も、また日本語を用いてはいるが抵抗的な作品も全てそこに包括することで、暗黒／光復という確立された枠組みに安住しないためである^{*九}。第二に、へ日本語文学」と言うことで、書き手の出自や母語の多様性・多重性を示唆するためである。つまり作品的にも書き手に関しても、既存の評価枠組みに捉われないようにするためにへ日本語文学」という用語を用いる。関連して、韓国で用いられる「이중언어(二重言語)」(bilingualismの朝鮮語訳)という用語も用いない。尹大石が言うように、「二重言語」とは単に日本語と朝鮮語を示すものではなく、日本語を用いた朝鮮の現実の再現の試みだという意味だとしても、その翻訳語がもたらすイメージに引きずられて、日本語／朝鮮語といった対立、ひいては暗黒／光復といった認識的基盤に連れ戻されるのを避けるためである。

二・鄭百秀の研究目的と方法

鄭百秀は植民地期の言語状況を、日本語が優位にあるという支配者側の言語差別イデオロギーに基づきながら日本語と朝鮮語が対立・共存するへ二言語状況」だと捉えている。

そのような認識のもと鄭が主に問題とするのは、本来外国語である日本語が「国語」として強制されるその反作

^{*九} とはいえ「親日」とは何かは、より慎重な分析を要する。金在湧は①大東亜共栄圏という名の下になされる戦争への動員の呼びかけ、②内鮮一体化のための皇国臣民化の称揚する文学を「親日文学」だと規定している(김재용 『협력과 저항: 일제 말 사회와 문학(協力と抵抗—日帝末の社会と文学)』 소명출판, 2004, p. 58-59.)。しかし植民地下で親日行為をする背景には、その行為によって特殊利益を得る仕組みが存在するのであり、個々人の活動は植民地体制によって構造的に規定されている。したがって「親日」は、個々人の行動だけでなく、「親日」を「親日」として現象させる構造に着目する必要もある。

用として、朝鮮語を「(本来の(あるいは固有の)言語)」という観念的でありながらも実体的な像」、すなわち「(母語)」という想像体」*+として認識させる思考の働きについてである。換言すれば、対立的でありながらも結果的に互いに補完するように働く論理構成や言語状況が問題視されるのである。鄭は次のように述べている。

二言語間の優位と劣位、支配と被支配に関する認識を植民者と被植民者が継続的に共謀して助長することで、植民地期の朝鮮社会の差別的二言語状況 (diglossia) は維持されていった。(p.17)

〈状況〉があつて思考の論理が働き、また思考が働くことで結果的に〈状況〉が維持されるという循環が想定されていると考えられる。

鄭に従えば、以上述べた状況と思考は、植民地末期の日本語文学に関する研究の方向性も強く規定してきた。単純化すれば「暗黒期の作品」「親日文学」という呼び方に代表されるように、文学作品を善と悪に二分し、〈日本語文学〉も基本的に否定的対象として構成するよう機能したのである。鄭は〈日本語文学〉に関する先行研究の流れを次のように整理している。

第一段階…日本語で書くこと自体を反民族的・親日行為と見做す(白鐵)。

第二段階…日本語で書かれたとしても「抵抗」的内容を持つ作品があることを主張する。しかし日本語／朝鮮語という対立軸から、抵抗／協力、親日／反日という対立に移行しただけで、二項対立的枠組みは維持されるという

*+ 『韓国近代の植民地体験と二重言語文学』, p.23. 以下『韓国近代の植民地体験と二重言語文学』からの引用は、引用の直後にページ番号のみを示す。

問題を残している（林鍾国、宋敏鎬など）。

第三段階…（日本語文学）を「抵抗」と「協力」が混ざり合いグラデーション化したものと捉える。つまり抵抗の中の協力や協力の中の抵抗といったように。しかし抵抗／協力という枠組みが結局のところ維持されることで、作品世界を再び二項対立の枠の中で解釈してしまっている（金允植、川村湊など）。

要するに二項対立思考は、日本語強制の反作用として発現する母語としての朝鮮語という情緒的イデオロギーを生むだけではなく、朝鮮近代文学史の記述を規制する基本的イデオロギーともなった、ということである。状況認識と研究の進展が連動しているのだと言える。そしてその言語イデオロギーは、「（韓国人＝韓国文化＝韓国語）」（p.28）という単一民族言語イデオロギーへと変貌しつつ、研究言説を支配していったのである。「国文学」の出发点となった趙潤済『國文學史』（東邦文化社、1949）に典型的に見られるように。

このイデオロギーがもたらす問題は、①日本語が「国語」（＝日本語）とされた過去を悪とし、朝鮮語による民族文学を樹立しようとする現在を善として図式化することで、過去と現在を分断し、かつ植民地期の「二言語状況」を隠蔽するように働くこと。

②解放後も自民族語中心の文学史を樹立しようとする欲望を掻き立て、結果的に内部の画一化と外部の排除をもたらす点において、植民地期の「国語」による「国民」文学の建設という理念の延長線上に留まってしまったこと。

③母語イデオロギーは、自言語を統一的で直接的で透明な伝達を可能にするものと見做すことで、言語構成員を「ネイティブ・スピーカー」として位置づけてしまうこと。つまり鄭が問題にする言語イデオロギーとは、解放後も植民地の残滓を温存するだけでなく、帝国主義的思考を隠れた規律権力として無傷のまま維持・機能させてしまふものだと言える。

それゆえその言語イデオロギーを問題にしつつ、〈韓国人＝韓国文化＝韓国語〉という強固な結びつきをいかに解体するかが鄭百秀の課題となり、その方向で〈日本語文学〉も読まれている。それは植民地の文学作品を「二言語状況」の中で再読するための方途に他ならない。そしてそれは植民地状況に対する認識の修正と研究のあり方に対するドラステイックな変更を要請するものでもある。

鄭百秀は以上の目的に対し、次のような方法を用いている。母国語中心主義に陥らずに〈日本語文学〉（鄭の用語では「二言語文学」）を読むために、テキスト、書き手（「植民地的主体」*^{十一}）、言語状況、認識主体、そしてそれらの関係を終ることなく懐疑・再定立すること。換言すれば読み手側の特定の価値観を問い直しつつテキストに向き合い続けるために、当時の言語状況へテキストの言語世界を（還元）するという方法である。

以上が鄭の議論・方法の大枠であるが、以下では言語状況を検討する際の理論的な根拠となっている「対形象化」と、テキストの書き手である「植民地的主体」に問題を限定して議論を進めていきたい。

三・対形象化について

対形象化は、鄭がテキストを還元することになる植民地朝鮮の言語状況や、日本語と朝鮮語の「共謀」関係を議論する際の理論的根拠となっている。

母語の観念的実体化は常に相互対立・並存する二つの言語の対形象的関係に従属的に起こるのであり、植

*^{十一} 鄭百秀『コロニアリズムの超克』、一頁。

民地朝鮮住民に韓国語〔한글어〕が母語として観念化される程度は、支配者（他者）の言語である日本語が自分達の言語生活にどの程度強制的に介入するかに比例すると見ることが出来る。すなわち日本語と関係を持つことが現実的に不可避である場合、また日本語から言語的な疎外を実際以上に体験する場合、その反作用として韓国語〔한글어〕にとつての本来性と固有性が超経験的本質として想定されるのである。（p.24）

対形象化については、鄭はカントを参照していると思われる。しかしここでは、（日本語文学）が翻訳という行為と密接な文学作品群であることから、酒井直樹の対形象化の議論との比較を行い両者の差異を検討しておきたい。よく知られているように、酒井の対形象化を巡る議論では、一つの形象は単独で現出するのではなく他の形象との関係の中から現れ出ることが論じられる。酒井は対形象化と形象について次のように述べている。

形象はひとつには虚構であり、と同時に、未来に向かって人の行動を促すものである〔……〕。したがって、形象は、同一性の欲望を生産する想像力を統御する。形象は想像力の論理の核心的な事象である。形象を経なければ、同一化の欲望を理解することができないであろう。しかし、ここで強調したいのは、形象への欲望は、ひとつの形象に向かって一元的に展開するのではなく、他の形象との対比を含みつつ、空間的に展開する点である。*十二

酒井は対形象化が産出する形象の歴史性、すなわち形象が歴史的に構築される点にも注意を払っている。しかし

*十二 酒井直樹『日本思想という問題』岩波書店、一九九七年、五三頁。

酒井の対形象化を巡る議論は、諸形象がカント的な図式論に則る形で産出される仕組みを記述することに主眼があるため、形式論理的な側面が強いものとなっている。そのため諸形象の虚構性、あるいは諸形象が経験的対象ではなく理念的観念の対象であることに議論の力点が置かれている。

そのような対形象化を起こすものとして、酒井が〈翻訳行為〉に着目したのも周知の事実である。酒井が論じる〈翻訳行為〉とは、ある言語から別の言語へ意味を移送するという、*translation, traduction*の語源的イメージ、言い換えれば「中国語」や「日本語」といった実体的な諸言語がまずあり、その間で〈意味〉が運ばれるという一般的な翻訳観とは異なる。むしろそのような翻訳観や言語観を生み出す行為としての〈翻訳行為〉を指している。つまり何らかの記号をもとに作られた一連の表現を「翻訳」することこそが、「翻訳される言語」と「翻訳する言語」という対形象を同時に発生させるのであり、一般的な翻訳観を成立させるということである。その意味で酒井の言う〈翻訳行為〉とは、「日本語」「朝鮮語」「フランス語」といった形象を対関係的に同時に発生させる原初的な作用を意味している。「自国語の体系的な統一体としての形象は、この図式との相関において対となる外国語の形象と同時に与えられるのであり、自国語は外国語と同時に生産されるのだ。」*十三。

それに対して鄭百秀の議論は、植民地状況という具体的なシチュエーションを前提せざるを得ないため、「対形象化」という言葉を用いいつも実体的な言語イメージが別の形で構築される過程に触れており、翻訳が諸言語を分節するという酒井の議論とは異なる面を持っている。この点に酒井との差異だけでなく、(ポスト)コロニアル研究の困難も潜んでいる。

酒井との差異としては、第一に、植民地朝鮮においては、二項が「翻訳」を通じて「同時に」に産出・構成され

*十三 『日本思想という問題』、六二頁、強調引用者。

るといふよりも、日本語の強制が朝鮮語を（不均衡に）形象化する（例えば「母語」として）という点である。換言すれば、二言語が（翻訳行為）を通じて同時に分節・産出されるというよりも、（翻訳）の不在の中で、すでに何らかの価値が充填された言語が別の言語を強制的に産み落とし、そして互いに支えあう現象がある、ということである。「日本語と関係を持つことが現実的に不可避である場合」や「言語的な疎外」といった言い回し、あるいは「反作用」といった鄭の先に引用した言葉は、翻訳の不在の中で対形象化作用に述べたものである。つまり言語を分節するのは、（翻訳行為）だけでなく一方的な言語の押し付けによっても生じると考えられるのである。

第二の差異は、上で述べたアンバランスな「対形象化」に関連したこととして、鄭は別の個所で言語間の権力関係について述べている点である。それは、差別的な二言語状況においてテクストを生産する被支配者側の文学者の言語行為には、二つの言語のどちらかを選択することが文学活動の前提的条件として内包されているというものがある。それゆえ生み出されたテクストの言語は、単一な統一体としての言語としてではなく、選択された言語と除外された言語の間で起こる多様な権力闘争を経た（あるいは闘争中の）、二者関係の中の朝鮮語ないし日本語として認識しなければならない（以上 p. 32 参照）。

ここまでの議論を踏まえながら鄭のこの指摘を解釈すれば、権力関係のもとでの言語選択は、被植民者側にとつて不平等な（翻訳行為）の実践として現象する、ということになる。そうであるとすれば、植民地状況において（翻訳）は、植民者側で不在化し、被植民者側で不平等的に現象するということになる。この点が、酒井の議論では論じられなかった論点となっている。すなわち（翻訳）を行う主体は、全て同じ地平にあるのではなく、階層によって自発的に行ったり強制的に行わされるといったような複数の様相がありうるのである。またどの立場にある者が翻訳するかによって、分節と価値化のあり様も異なつてこよう。

ここに至ると諸言語が分節され現前するその仕方が、少なくとも植民地朝鮮においては言語の押し付けと不平等な（翻訳）という二通りあることが明らかとなる。（翻訳行為）なしにそれと同様の現象が起こりうるのであり、また（翻訳）の不平等さがあるのであり、そしてどの主体が（翻訳）をするかによってその後の現象が異なりうるという点が、酒井と鄭の「対形象化」についての議論の差異を形作っている。鄭の議論は、（翻訳）概念が一枚岩的なものではなく、その内側で重層化していることを明るみに出すものであり、概念内部の亀裂に注意を向けさせることで、その再理論化を促すものとなっている。

また植民地的状況における「選択し書く」という行為が、不平等ではあれ（翻訳行為）として日本語と朝鮮語を分節し、また両者を相対化するのだとすれば、鄭の議論からは植民地主義的な二項対立に基づく言語観を転覆させる可能性を見出すこともできるかもしれない。「選択し書く」という翻訳にも通ずる行為自体が、言語に充填された価値を解体するだけでなく、「言語」そのものを再構成する可能性があるためである。鄭も、テキストを当時の状況に（還元）するという彼の分析方法の意義を、「テキストの言語に内在する二つの言語の差異の抑圧、対立関係を問題化することで、植民地期の二重言語文学に対する今日の母国語中心主義の認識（偏見）の起源と形成過程を、同時に記述対象として処理しうる点にある。」（p. 33）と述べている。

しかしここであえて一つ疑問を呈してみたい。母国語中心主義の形成過程が明らかとなり、それが批判され、そして場合によっては解体されたとして、では残り物としての「朝鮮語」とは何であろうか。ただの規則性を帯びた記号の体系と認識されるものであろうか。このような疑問を呈するのは、言語とは一方で観念的なものではあるにしても、それは認識論的な範疇に収まるものではなく、存在論的な側面も持っているように思われるためである。言語の実体化が批判されているにもかかわらず存在論的と言うのは、言語それ自体が何らかの形を持って実在する

ということではなく、少なくとも言語が個々人の思考や感情やふるまいを規制するまでに身体化されているという点からである。

鄭の「対形象化」の議論が酒井のそれと異なる部分を持つていたとしても、図式論的な議論ゆえに、言語を観念的なものとして扱う点において共通しているように思われる。そしてそのことは、「(韓国語文化 || 韓国文化 || 韓国語)」というように三者がイコールで繋がれていることから、「韓国人」や「韓国文化」などのアイデンティティについても妥当しうるであろう。しかしそのように言語やアイデンティティを観念的な側面からのみ処理することは、言語の身体的側面や個々人が向ける言語への情念を否定的に捉えさせるだけにならないだろうか。それはまた、翻訳する主体を不当に位置づけることにならないだろうか。以下ではこの大きな問題の一端に触れるために、言語を観念的な側面から処理する理論的枠組みを支えるよう機能している「植民地的主体」の問題について論じていきたい。

四・植民地的主体について

先に、差別的な二言語状況における言語選択には多様な権力関係が介入しているという鄭の議論について論じた。そのような権力関係こそが、被害／加害 協力／抵抗 親日／反日、日本語／朝鮮語といった二項対立を生み出す基盤になるのである。鄭は成立してしまっただけの二項対立的構図は、植民地的主体の生成と発現を「隠蔽」してしまうと言っている。これは本稿第二節でも述べた、二項対立的図式が植民地の「二言語状況」を隠蔽するのと同じ事態を指している。そのもう一方で、植民地的主体は、宗主国の価値体系を内面化する過程で「分裂」を経験

する以上、二項対立的視点の成立がそもそも不可能だとも鄭は述べている。

つまり、コロニアリズムとアンチコロニアリズムの二項対立的構図の中で植民地的主体の位置を単純化すると、植民地的主体の成立と発現が隠蔽されてしまうということである。そもそも二項対立的視点自体が原理的に成立不可能なものであるという点は、植民地的主体が植民地主義的価値体系を内面化する過程で必然的に自己分裂を経験するという事実から見ても自明である。（『コロニアリズムの超克』、一〇頁）

この場合「隠蔽」されてしまう植民地的主体とは、植民者の価値体系を受容・内面化し、それをイデオロギーとして様々な分野で機能させる存在のことである。二項対立的構図は、植民地的主体を「被抑圧者」としてのみ規定することで、植民地主義と協働してしまう側面を隠すように働いてしまう。だが植民地的主体は、抵抗するのであれ従属するのであれ植民者側の価値に則つとらざるを得ないため、一つの主体の価値体系の中で従来の価値と異なる価値との分裂が経験される。それゆえ分裂的な主体として生成すると同時に二項対立的構図も不可能にしてしまう。

しかしながら「分裂」という用語自体は、二項対立的構図を不可能にするというよりも、むしろ二項対立的イメージを強く喚起するものである。そこからすれば主体を「分裂」として規定することは、二項対立を逆に引き寄せ強化してしまう可能性があり、ジュデイス・バトラー風に言えば植民地主義的マトリクスに引きずられてしまう惧れもある。

植民地的主体の現実的条件について鄭百秀は次のように述べている。

したがって、植民地的主体の現実的条件とは、支配者の文化を否定するためにも、あるいは、被支配者の土着文化を肯定するためにも、まず支配者側が提供する文化価値を学習しなければならぬことである。支配者に対抗するルールそのものが、支配者のものだからである。(『コロニアリズムの超克』、一一頁)

「否定」や「肯定」を行うこと、あるいは「否定」される「文化」と「肯定」されるそれを立ち上げるために「学習」すること。「学習」することが二つの「文化」を分節し立ち上げていくとすれば、ここでも不平等の対形象化作用が働いていると考えていいだろう。「不平等の」というのは、言うまでもなく被植民者側が主に「学習」するからに他ならない。

ところで「学習」することに対形象化の働きがあるとすれば、〈翻訳行為〉の重層性や抵抗の可能性を明るみにするものであった鄭の対形象化の議論と同様、〈学習行為〉も一つの結果にのみ行き着くものではなく、分節の仕方を多元化する可能性を理論上持ちうる。だとすれば「隠蔽」される植民地的主体で起きていることは、植民地体制協働的な側面だけではない、「分裂」ないし価値体系の分節の手前での、〈学習＝翻訳〉を通じた自分自身の多様な書き換え、更新ではなかるうか。旧価値の抽出と同時的な新価値の産出も、意識的であれ無意識的であれ、〈学習〉する過程で起こる対形象化の帰結だからである。ならば先に見た「植民地主義的価値体系を内面化する過程」は、「旧」価値とみなされるものと「新」価値とみなされるものを産出する条件であって、二項対立を逆に可能にするものとなるう。そのため「分裂」は、植民地的主体の変容に応じて現象する「新」／「旧」の分節の後で帰結する結果、効果と考えるべき「経験」だと見るのが適切である。要するに自己変容の仕方に応じて、「旧」なるも

のや「新」なるものも、そして「分裂」という様相も規定的に生成してくると考えられるのである。

以上のことから「分裂」という規定は、植民地的主体の価値体系の学習・受容する側面をまず「隠蔽」する可能性を持ち、両者はむしろ不協和音を奏でる関係にある。植民地的主体が「分裂」しているということを属性的のように理解してしまうことは、別の「隠蔽」を犯す恐れがあるのである。

このような「隠蔽」と「分裂」の不調和を認識するかしないかは、例えば金史良「光の中に」の結末部分や彼の第一小説集『光の中に』（小山書店、昭和十五（一九四〇）年）のあとがきで述べたことをどのように解釈するかにも関わってくる問題でもある。

「先生、僕は先生の名前知ってるよう」

「さうか」私はてれかくしに笑って見せた。「云つてごらん」

「南先生でせう？」さう云つたかと思うふと彼は私の手に自分の脇にかかへてゐた上服を投げ付けて、嬉々としながら石段をひとり駆け下りて行くのだつた。

私もほつと救われたやうな軽い足取りで倒れさうになりながら、たたたと彼の後を追うて下りて行つた。

（「光の中に」結末部分） *十四

現実の重苦に押され、私の目は未だに暗い所にしか注がれてゐないやうである。だが私の心はいつも明暗の中を泳ぎ、肯定と否定の間を縫ひながら、いつもほのぼのとした光をもめようと齷齪してゐる。光の中に早

*十四 引用は『金史良全集』（金史良全集編集委員会編、河出書房新社、昭和四八（一九七三）年）三六頁から。

く出て行きたい。それは私の希望でもある。だが光を拜むために、私は或はまだまだ闇の中に体をちぢかめて目を光らしてゐねばならないのかも知れない。(『光の中に』あとがき部分) *十五

「光の中に」は、主人公の南(みなみ/なん)先生と朝鮮人と「日本人」の間に生まれた山田少年のアイデンティティを巡る葛藤と、二人の交流を描いた作品である。最初の引用は、南先生と山田少年がアイデンティティの危機からの解放に向かう様子を描いたように読める箇所である。

鄭はこの部分を「共同体のイデオロギーの存在拘束性の外部を探求しようとする欲望と、その内部に安住しようとする欲望との間に引き裂かれていた、作家の意識が、後者のほうに傾倒されてしまうことを、「光の中に」の結末は反映している。*十六と、「分裂」を強調するような解釈を施している。だが、これまで論じてきたことと対称象化という理論の帰結を踏まえるならば、「分裂」という鄭の読みとは別の読みも可能だと思われる。とりわけ『光の中に』のあとがきの「闇」という言葉は、書き換えが起ころうとする状態を指しているという解釈も成り立つだろう。つまり、「光」射すところに出るために、自らの価値を更新する必要があるという読みである。「闇の中に体をちぢかめて目を光らしてゐねばならない」という箇所が、植民地主義的価値に対する警戒心としてあり、別の「光」(例えば「光復」)まで待機すべきだ、と読みうるものでもあるとすれば、なおさら「分裂」とは別の読みが必要となる。

「書き換え」と「分裂」という言葉に少々こだわっているのは、もし「書き換え」という方向で解釈を進めるな

*十五 引用は『金史良全集Ⅱ』(金史良全集編集委員会編、河出書房新社、昭和四八(一九七三)年)六七頁から。

*十六 『コロナリズムの超克』、一七五頁。強調引用者。

らば、植民地的主体を、その根本において「分裂」していると捉えるのではなく、未知なるものへ開かれてある存在として理解することができるとある。そこに〈学習Ⅱ翻訳〉という議論を重ね合わせれば、植民地的主体を、単に植民者側の価値体系へ順応する存在としてだけでなく、他なる価値を学びつつ別様に書き換えることで新たな形象化や分節を可能にする存在だと把握することもできる。金史良が「肯定と否定の間を縫ひながら」と言っているのは、そのような主体のことのようにも思われる。そのように解釈コードを書き換えるならば、植民地期の〈日本語文学〉を構成する主要な要素である植民地的主体や言語状況は、やや垢じみた言い方をすれば、〈クレオール〉という観点から再検討することが可能となろう。このことは、鄭が母国語中心主義や「〈韓国人Ⅱ韓国文化Ⅱ韓国語〉」という単一民族言語イデオロギー批判のために用いた〈還元〉の拡張をもたらすことでもある。すなわち、「日本語」と「朝鮮語」という二つの言語像が構築されていく過程と両者の内実を明らかにするためだけでなく、母語（中心）主義も含めた多様な言語行為の検討を可能にする方法へと〈還元〉を開くことになるのである。それにより「状況」の捉え方も、より豊かに把握できるようになるのではなからうか。

もちろん「分裂」という概念の使用には、文学者たちが意図的に隠したあるいは「隠蔽」させられた彼・彼女らの実際の姿を露呈させたい、という鄭自身の意図もあったかもしれない^{*十七}。しかし「書き換え」という概念は、植民地的主体の現れている姿が―協力的であれ抵抗的であれ―そのままその者の姿の現前であるという前提に立つものであり、文学者の実際の姿にも直接的に関わってくるものである。また〈クレオール〉という認識も肯定的な側面のみを示すのではなく、文学者の行為によって生じる結果を指す用語に過ぎない。つまり「書き換え」は、

^{*十七} 例えば『コロナリズムの超克』での林和についての議論にそのことが現れているようにも見受けられる。『コロナリズムの超克』、二三五・二四三頁参照。

文学者の姿やその行為と社会との関係を繋ぎながら、両者の循環的な関係や文学者の責任、そして文学作品の解釈を再検討するための概念装置となりうるものだと考える。それにより言語を観念的に扱ってしまう問題は、一定程度クリアできることになろう。

以上、〈日本語文学〉研究の先駆けである鄭百秀の研究成果を中心に、「対形象化」と「植民地的主体」の意義と問題を検討してきた。「植民地的主体」は、「対形象化」作用をもたらす「翻訳」「書くこと」「学習」といった行為を行うことで自らを多様に書き換えていき、それを「翻訳されたもの」「書かれたもの」「学習の結果」などに反映する一方で、それらは再びフィードバックされることになるだろう。その原因と結果の循環のメカニズムや、それが主体と社会にもたらす影響、とりわけ抵抗と協力といった様相や「親日」という概念との関係、また認識主体に及ぼす影響等については、具体的な文学テクストにそくす必要があるため次の課題としたい。

（お・せじよん 琉球大学法文学部講師）

本研究は科研費（若手研究（B）：23720184）の助成を受けたものである。

This work was supported by (JSPS) KAKENHI(Grant-in-Aid for Young Scientists(B):23720184).